

釧新郷土芸術賞に輝く

受賞者の横顔

▷中◁

原点に戻るき
っかけに

な意欲を見せる。

二十年という長い間ミクロの目で、マクロの目でも、繰

昭和十一年釧路市に生まれ、現在、藤田印刷企画室に勤めながら湿原を撮り続ける。「湿原は見て感じるもの。見ると触れてみたくなるのが人間の心理だが、湿原にはそれが当てはまらない、自然を壊さず触れずに見ること、それで十分の魅力がある」が自論。長年撮り続けてきて湿原の世界を支えるのは水ということを悟った。水のあるところ、水を通して人間と係わる。「今後はこれらを踏まえた活動」と、新しい釧路湿原の発掘に力を注ぐ。四十八歳。釧路市貝塚二の六。

湿原撮り続けて20年

釧路湿原の追求をライフワ

ークに写真を撮り続けて二十一年、この間、自ら湿原の奥に足を踏み入れ、また、空からの撮影と様々な角度から息づ

く原始の四季をとらえて発表してきた。伊東さんが湿原にレンズを向けるようになったのは釣りがきっかけ。「ある日、ついに一匹も釣れない。釣れないなあ」とふと足元に

カメラに持ち替えた。こうして湿原の花を撮り出すと、こんどは虫たちも目に入り、次には鳥や動物たち。そうして何年かするうちに湿原のライフサイクルが見える

伊東さんだが「見落とした部分を再発見しては原点に戻って見つめ直す」という。今回、写真部門としては初の受賞の知らせに「もう一度原点に戻るきっかけにしたい」と新た

な意欲を見せる。昭和十一年釧路市に生まれ、現在、藤田印刷企画室に勤めながら湿原を撮り続ける。「湿原は見て感じるもの。見ると触れてみたくなるのが人間の心理だが、湿原にはそれが当てはまらない、自然を壊さず触れずに見ること、それで十分の魅力がある」が自論。長年撮り続けてきて湿原の世界を支えるのは水ということ

湿原の四季の美追求

空撮で海霧発生 の 解明も

目をやると、見たことのない美しい花…。何か新鮮なものを発見したという気持ち湧いて…」その翌日から釣竿を

ようになり、ネガが積み重っていた。作品の一部は朝日ジャーナルの「根釧原野」、文芸春秋の「くりま」「ニュートン」などに発表。五十八年には釧路の霧をテーマに「霧をさぐる」を発売した。

□写 真□

伊東俊明さん(四八)

(釧路市貝塚二の六)

アッパル君
木崎ゆきお

